
無職 偽職 + 女学生

鈴崎 緒兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無職 偽職 + 女学生

【Nコード】

N0707T

【作者名】

鈴崎 緒兔

【あらすじ】

働く意欲が皆無の無職（海藤）が、飛び込み自殺を図る女子高生（双島）を助ける。だが、救出の際の説得で成り行き上、海藤は「自分は探偵業を営んでいる」と嘘をついてしまう。

双島は探偵という業種に胡散臭さを感じながらも好奇心を抱き、その事務所で働かせて欲しいことを願い出る。

困惑しながらも、ある弱みを握られてしまい、双島を雇うことに。嘘を乗りこなそうとする海藤と、嘘の興信所を通じて生への理解を深めたい双島の後ろ向きで前向きなストーリー。

Lie 麦畑でつかまえて

三井住友銀行

店番 x 2 5

口座番号 2 9 4 8 5 7 2

普通預金通帳

口座名義人 海藤 日出道

2 3 4 1 0 6 1 2 , 4 6 7 円

俺は、銀行のATMの前で何か月ぶりに記帳したほかほかの通帳を見つめたまま、溜息をついた。

通帳の最後の行に記帳された数字は何度見ても変わらない。

「下一桁にもう一個0があればなあ。いや、どうせなら9がいいな」
つい、俺はそこらのおばちゃんが半分冗談で言うような言葉を割と真剣な願望として呟いた。

家賃が月々6万だろ。そして、最低生活費、本当の意味で『最低』生活費が月々4万。あと6回ほど月を過ごせば文無しか。

通帳には『お支払金額』に、憎らしいほど一系乱れず数字が並んでいた。

いや、正確には2月半ばに183円の普通預金利息が、ぽつねんと『お預り金額』の欄に取り残されていた。俺は、その『お利息三等兵』が悪の帝国『お支払金額』に対して孤軍奮闘の、一騎当千の大活躍を期待した。そして、彼の鬼神が如き働きを確認するため視線を下の行にずらした。

が、嗚呼無残！『お利息三等兵』はその下の行に鎮座する『月光の狼』の異名を持つ『光熱費上等兵』の圧倒的火力を前に成すすべな

く敗れ、経済の闇に散っていた。

さらに、その奥には『家賃大総統』が大量殺戮兵器の発射ボタンを手に高笑いしている様子が見えて、俺は恐怖心から通帳を閉じた。早く！誰か火急的速やかにお利息三等兵に増援と補給物資を送ってやってくれ！オーバー！

が、頼みの綱の『失業保険衛生兵』は半年以上前に退役していた。彼のこれまでの実績は、誠に筆舌し難く素晴らしい功績の数々を残し、枚挙に暇がない。彼の退役に際し、もうこの戦争に勝つことはできぬと覚悟し、（本気で）涙したものだ。

そして、賢明な読者諸兄はもうお気づきだと思うが、『給与閣下』は既に名誉ある戦死を遂げている。だが、しかし『給与閣下』の戦死の真相は戦況を悲観しての自殺だった。というか、辞表だった。閣下、あなたがお亡くなりになってもう1周忌ですね。ほら、閣下。自動ドアのむこう側を見てくださいよ。あの時と同じように桜が、新入生や新入社員を激励する桜が燦々と咲いていますよ。本当、とつとと散ればいいのに。

俺は、無造作に通帳をバックの中に入れて、僅かな悪態をつきながら銀行を後にした。

外に出ると、誰もが「あら、今年も桜が綺麗ね」と桜並木の桜を眺めるために上を向いて歩いているところを、「無機物万歳！」と言わんばかりにアスファルトを観察しながら、歩道の隅を闊歩して、帰宅の途についた。気分はさながら『富岳百景』の太宰治。皆が富士山に目を奪われているところを無視して月見草を愛でる。だが、「あら、アスファルト」と言ってくれる、桜に無関心な老婆がいな

いことが、太宰と俺との決定的な格の違いだった。中心街から下宿先までの帰路の途中にある踏切に差し掛かったところ、けたたましい警告音と共に遮断機が降りてきた。

騒音と共に遮断機が降りてくれば、幼稚園児でも遮断機を乗り越

えないよう、遮断機の少し前で立ち止まる。別に、そういう遊戯ではない。この踏切は遮断機が下りてから電車が通過するまでにしばらく時間がかかるものの、数分後には何百トンもの電車が線路を高速で走るため、危ないから誰も遮断機を越えていこうとはしない。何度でも言う。幼稚園児でもだ。

だが、しかし、隣にいた女子高生は、まるで自分は筋肉超人なのだと勘違いしていらっしやるのか、遮断機の下を屈んで潜り、俺に背を向けた形で線路の上で棒立ちになった。

『線路には 飛び込み自殺が 良く似合ふ』。

この場合の季語は自殺。自殺は師走の季語。

残念ながら、今は師走ではない。4月だ。

誰か、止めるよ、と思い、周囲を見渡したものの誰もいない。

彼女を止められる者は自分しかいなかった。

これだから田舎は困る。ちよつと郊外に出れば人の子一人居ない。居たと思ったら自殺志願者だ。

「おい、危ないぞ!」

俺は、踏切の警告音に負けないよう大声で女子高生に呼びかけた。

「知ってる」

少女は抑揚のない声で呟く。

「それは良かった。自殺か？」

少女はこくりと頷いた。

「若いのに難儀なことだ。まあ、落ち着きたまえ」

「止めても無駄よ」

警告音が喧しいのに、声を張り上げてもない彼女の声は耳掃除中に耳かきが囁いたかのように透き通るように鮮明に聞こえた。彼女の言葉には冷酷、諦観、無慈悲といった感情がてんこ盛りに詰まっていた。まるでネギダクのツユダクだ。しかしなんで無慈悲？なんで、俺が慈悲を乞っている感じになっているの？

「俺、血を見るのが嫌いなんだ。グロいのか駄目なんだ」

「じゃあ、あっち向いてなさいよ」

少女は手提げバックを持ち上げるように右手の肘を曲げ、自分の後ろを人差し指で指した。

「音も嫌なんだ。知ってる？ホラー映画ってミュートにすると案外怖くないんだぜ？」

「大人なのにふざけた人ね」

少女は、腰まで伸びる黒々とした長い髪を手ですくい、電車が迫ってくる状況を意にも介さず、『凜』という言葉が似合う舞いで堂々と俺の方へ振り返って言った。振り向いた拍子に扇を開いたような弧を描いて回るスカートの裾が神秘的に感じられ、現実を忘れて目を奪われた。

緊迫した状況で少女に見惚れている場合ではない。俺は、少し自

分を叱責し、恥ずかしさを紛らわすために

「職業柄ね」と、両腕を挙げて、お道化て言った。

無職はある意味で気楽だ。

無職に無いもの、それは金と責任。どちらも人間社会を構成し、維持するのに極めて重要な要素。その二つを放棄して得たものが、暇とお道化。人間を風化し、墮落せしめる極めて唾棄すべき要素。

「どんな職業なの？」

「えっ？職業!？」

電車が見えてくれば、どうせ力づくで彼女を線路から轢きずり出すつもりだ、ああ、間違えた、引きずりだすつもりだ。しかし、彼女を自殺から引き揚げた時に、無職に助けられたと知ったら、釈然としないだろう。俺なら線路に向かって踵を返す。

「冥土の土産にするから、早く答えてよ」

こいつは、なんてくだらないものを冥土に持っていくつもりだ。もつと持っていくものがあるだろうに。お釈迦様だかキリスト様も『いやいや、お気持ちだけで結構』と苦笑いをして大人な反応をすると思う。

「ただの探偵さ」

俺は、少し逡巡し、出来うる限りの虚勢を張って嘘をついた。ただし、手は汗で滲んでいる。

なぜ、探偵なのか。説明するのも恥ずかしいのだが、俺のちっぽけ

なシナプスが繋がってそこに至った経緯は以下のくだらない理由だ。
『昨日、コナン君のアニメを見たから』

我ながら自分のいい加減さに情けなくなってくる。

『裸の大将』を見ていたら『流離いの画家』だっただろう。『家政婦はみた』をみたならば『コンプライアンスの敵』と答えていただろう。

まだコナン君を見ていて、本当に良かった。俺は心底安堵した。

「興信所の人間なのね」

少女は、綺麗に整った眉を顰めて、訝った様子で苦笑した。

そうだ。興信所と言えば良かった。どこか稚気を含んだ探偵という言葉をついてしまった自分を恥じた。

「ああ、そうさ。興信所を経営しているんだ」

もう、この際だから一回張った見栄はどんどん大きくしておこう。
社長に救われたと思えば、無職に救われ（以下略）

「そう。…ねえ、話は変わるけど私を助けていい？」

少女は、自分の胸に右手をあてて尋ねてくる。

「ああ、もちろんさ。目の前でこんなに可愛らしいお嬢さんがグロテスクに変形して死ぬのは気持ちいいものじゃないからね。美の喪失さ。100人中98人の男はそう答えるね。ちなみに残り2名はカニバリズムを信仰しているような性的倒錯者。俺は違うけど」

「まったく、あなたって本当にいい加減な人ね。初めてよ、あなたみたいな大人は」

「大人、大人つてうるさいな。俺はまだ26だぞ」

おっさん、との『20代の男に言っではならないNGワードNO5』を少女は言い捨て、俺の『心銀行』に不良債権を蓄積させた。電車がそろそろ近づいてくる頃だ、毎日のようにこの踏切を踏んでいる俺はそう確信し焦りだした。

「な、こんなだらしのない大人でも生きていけているんだぞ？ 渡る世間に鬼はなしだ」

これも、嘘だ。俺が見てきた社会には、鬼ばかりだった。

「胡散臭い大人という言葉も付け加えなさい」

「分かった。分かった。なんでも君の言う通りにするから。駄目人間の俺のところに来い！」

俺は、少女の方向に向かって手を差し伸べながら叫んだ。

「そこまで卑下されると逆に傲慢だわ。でも、なんでも言うことを聞くのね？」

「おう。俺はいい加減な人間だが、約束は守る！ 必ずだ！」

俺は相当焦っていた。電車が緩い『く』の字型になりながら、カブを曲がってきた様子が見えたからだ。一分も経たずに踏切を通過するだろう。

「あなたの名前は？」

「『かいとうひでみち』！」

俺は自分の名前を叫んで、少女に駆け出そうと軸足に力を込めた。軸足が地から離れようとした瞬間、彼女は俺の方に向かって小走りで駆け寄り、遮断機を潜った。

助かったのか？ 瞬時の出来事に頭の回転が追い付かない。

「約束よ。なんでも言うことを聞いてもらうわ。私をあなたの元で働かせなさい。もし、約束を破れば、あなたへの真偽如何は別とした恨み辛みを書き綴った遺書を残して死ぬわ。分かった？ 『かいとうひでみち』さん」

そう微笑みながら言った少女の後ろを電車が甲高い金属音を撒き散らして過ぎ去っていった。

電車が過ぎ去った後は、まるで空爆が去ったかのような、平穏な日常が戻っていた。

しかし、俺の思考回路はその後しばらくの間、元通りに戻らなかった。

俺は、瞬く間に『見た目も中身も無職』から、『見た目は無職、中身は探偵』へと変貌を遂げた。これが、ジョブアップなのかどうかは定かではない。

興信所とは、何をすればいいのだろうか。許認可を要する業種なのだろうか？要する気がする。とすれば、モグリの探偵か。怪しさに拍車がかかった。

興信所の仕事とは？との問いの解を求めようと思いが巡りに巡ったが、なんの回答も導き出せない。しかし、後ろには双島光希と名乗った少女が容赦なく付いてくる。

「なあ、考え直さないか？興信所の仕事なんて君が考えているほど楽しい職業じゃないんだぞ？」

振り返って光希に話しかける。

「心配しないで。あなたの様ないい加減な人間がどうして生きていられるのか興味があるだけよ」

お前の心配ではなく、俺の心配をしてくれ、と心底願う。

「事務所と言っても俺一人で経営している個人事務所だけ？下宿も兼ねている場所だ。うら若き乙女がおいそれと足を踏込むには危険だと思わないか？」

「変な気を起こしたら、あなたの眼を潰して鞆丸を蹴り潰し、大声で喚くわ。あなたに私を犯す勇氣があるかしら？」

こいつならばやりかねない気がする。
もちろん、小心者を美德と奉る俺にそんな勇氣は無い。いや、待
て。そもそも子供に興味がない。

「女子高生が『鞆丸』とか『犯す』って言うなよ。こつちがなんか
凹むだろ。じゃあさ、せめて明日からにしてくれないか？子供と言
っても女性なんだしさ。掃除したいんだ」

「手伝ってあげるわ。『所長さん』」

所長と呼ばれて一瞬誰の事を言っているのか分からなかった。

「いや、いいよ。君の想像以上に男の部屋というものは汚いんだよ」
世間一般の全ての男性の部屋を探訪したわけではないので一概に
も言えないが、俺の部屋に限って言えば本当だ。

「だから手伝ってあげるんじゃない。二人で掃除すればその分はか
どるわ」

光希は俺の言ったことの真偽を確かめたいのか、俺に執着して言
及した。

せめて、一日でも時間が欲しかった。今のままでは嘘がバレてし
まう。バレてしまえば、こいつは俺の名前が満載の遺書を残して自
殺する。あらぬ嫌疑をかけられ、俺は真つ当な人生を投了しなくて
はならない。無職が真つ当かどうかは棚に上げておきたいが、あま
りにも重く大きい現実なので腰を悪くする恐れがある。しかるに、
再考すると女学生を死に追いやった者より無職は至極真つ当だろう。
嘘を付くのは簡単だけれども嘘を貫き通す事がこれほど難しいも
のだったのかと痛感した。

「いや、頼むよ。『男』の部屋だぞ？高校生の君には刺激が強すぎる。いいか。もう一度言う『男』の部屋だ」

俺は『男』を強調して言った。その言葉が持つ言外の真意を汲み取ってもらおうと。

「問題ないわ。卑猥なDVDやエロ雑誌、自慰の器具が出てきても、なんとか我慢するわ」

光希は一瞬嫌な顔をしながらも、こちらの顔が赤面するぐらい恥ずかしい単語をさらりと言った。

「俺の沽券に関わることだから言うておく。自慰の器具は持っていない」

「DVDと雑誌は持っているのね」

「ごめんなさい。持っています。申し訳ありません。猥褻物を処分したいので、光希様、改めて明日来ていただけませんか？」

光希は、「最初からそう懇願すればいいのよ」とため息をついた。俺とこいつとは曲がりなりにも主従関係が結ばれるんだよな？と腑に落ちぬ疑問はあるものの、一日の猶予は頂けそうだ。

「じゃあ、携帯番号教えてよ。明日、準備が整ったら連絡するから」
「番号は嫌。メアドにして」

どこのキャバ嬢だよ、と思いつつながら、光希の言う通りメアドを交換して（俺の携帯電話の番号はしっかり教えさせられた）別れた。

別れた後、改めて携帯電話に映し出された光希のメールアドレスは、英数字が不規則に羅列していた。

アパートに戻り、溜息をついた。この部屋は8畳のフローリングだったと記憶している。雑誌や弁当の空箱、ペットボトルが散乱し、床が見えないから、確信は持てない。

まだ学生の時は、一人暮らしへの期待と将来への希望を持って入居した、光り輝いていた部屋も、勤め人になってからは荒れだし、無職になってからは性欲と怠惰の巣になった。未来が見えないからだ。

ああ、面倒な事になってしまった。掃除か、何か月ぶりだろうか。まず、掃除機の掃除から始めた。そして、壁一枚外に出せば猥褻物陳列罪で書類送検されそうな危険物の除去に成功し、床一面に散らばる書籍を見栄え良く本棚に並べ、灰皿変わりになっているペットボトルや空き缶を捨て、氷山のようなキッチンの皿を、ジェンガのように崩さないように片付けた。

なんとか、来客が玄関を開けても、そのまま閉められるような事態にはならない程度の掃除はできただろう。

自己満足に浸りながら、時計を見る。深夜十二時。

なんだ、『まだ十二時』じゃないか。

ゲーム機の電源を入れ、何週目か分からないRPGゲームをニューゲームで始めた。

ゲームを進めながら、探偵について考える。

探偵と言えば、殺人事件の推理が醍醐味だよな。ただ、殺人事件が起きれば俺は間違いなく警察に任せる。それが警察の仕事だから。

税金で警察を雇っているんだ。わざわざ民間人が推理しなくてもよし。無職は税金払ってないだろ、との突っ込みもしなくてよし。そうさ、逮捕権がない探偵が出しゃばった所でなにもいい事などない。それに誰に成功報酬をもらうのであろうか。謎は尽きない。

探偵について考えることを止め、次にどんな場面が展開されるか分かっているゲームに熱中した。

一旦ゲームを止めて、遮光性のカーテンを開けると空は薄く明るくなっている。時計を見ると短針は6より2〜3メモリ前で止まっていた。

流石に瞼が重くなってくる。少し仮眠を取ろうか。ベッドに横たわり、小休止を取るため微睡んだ。

一時間ほど眠っただろうか、俺は携帯のバイブの振動音で目を覚ました。着信はメールだったのだろう。すぐに鳴り止んだ。時計に目をやると短針は『2』の文字を指していた。

窓を見遣るに、お天道様が高々と舞上がっていることから昼の二時であることを確信する。

寝過ぎてしまった。俺は恐る恐るメールを確認する。誰からのメールか、ほぼ確信しているが、こんな時ばかりは迷惑メールであることを希望する。

だが、折り畳み式の携帯を開けた瞬間、その希望は打ち砕かれた。

差出人「双島 光希」

題名 「遺書」

本文 「一時間以内に連絡がなければ、死にます」

ほぼ、思っていた通りの内容だ。遺書という言葉を出せば構ってもらえると思いやがって。俺は舌打ちをした。

「すまない。掃除が楽しくて時間を忘れてしまっていたようだ。四時に昨日の踏切に来られるか？踏切と言っても『中』じゃないぞ。いいか？『外』でだ」とメールで送る。

「寝てました！」とは、さすがに言えない。

寝起きなため、ちょっと面倒臭くなっていることは口が裂けても言えない。

メールを送ってから一分も経たぬうちに双島からメールが返ってくる。

差出人「双島 光希」

題名「了解」

本文「」

題名に入れてきやがった。本文は空欄だ。

こいつには、まず社会人のマナーを教えよう、と心に誓った。

結局、興信所の事は何も分からずじまいだが、ゲームをしている間にとある妙案が浮かんでいた。何も考えずに眠ったわけではないのだよ、ワトソン君。

別に業務内容が分からなくても良いのだ。仕事を光希に見つけさせればいい。要は顧客発掘、ニーズ喚起という奴だ。それが出来なければ、光希をクビにすれば良い。彼女も向いていない仕事だと理解してくれるだろう。大人とは約束を守るけれども、卑怯な人種なのだよ、光希君。

我ながら完璧な作戦に涙が出てきた。自己嫌悪の涙だ。どこでどう間違えてこんな大人になっちまったんだろう。

しかし、俺は自殺志願者を説得出来る凄腕心理カウンセラーではない。できることとできないことがあり、出来ないことの方が圧倒的に多いのだ。光希には良いカウンセラーを探してあげよう。俺ができることはそれだけだ。

約束の時間までに、プリンターで簡単な名刺と簡素なチラシを作成した。

興信所の名前は『日之出興信所』とした。

名前の日出道をモチーフとして命名した。やる気の無さが滲み出ている。

『日之出興信所

所長 海藤 日出道』

と印字された名刺がプリンターから出てくるのを見て、所長との肩書が胸をくすぐった。母さん、俺、無職から所長になったよ。届出も登記もしていないモグリだけど。

「これで俺も定職者か」

俺は苦笑いしながら呟いた。

四時十分前に踏切に行く、既に光希はいた。ちゃんと言いつけ通り『外』で待っていたことには感心したが、格好が良くなかった。

「待たせたかな。悪いね。っていつかなんでお前制服なんだよ！今日は土曜日だろ？」

「スクール水着よりはいいでしょ？いえ、そっちの方が良かったかしら？」

「良くないよ！どういう思考回路しているんだ？」

「まだ、あなたを信用していないもの。だから制服なのよ」

光希の言葉を反芻し、その真意を探る。あれか？襲われた際、制服の方が俺の立場が悪くなるということが言いたいのか？

悪魔か、こいつは。

「分かった。君の言いたいことは分かった。けれども、成年男性が制服姿の女子と待ち合わせしていたら、まずいだろ。条例的に」

光希は腕を組みながら、俺から顔を逸らして、それもそうね、と素直に言ったが、明らかにそれもそうねという同意の態度では無かった。

「まあ、いい。君は俺の妹ということにしておこう」

「そんな趣味は私には無いけれども、所長さんの趣味ならば、背に腹は代えられないわね。お兄ちゃんとも呼べばいいのかしら」

光希は目を伏して言った。

何か勘違いしておられるようだ。

その証拠に半歩、俺から引いたことを見逃さなかった。

「そういう意味じゃない。便宜上だ。外では俺を兄と呼んでくれ。その方が、周りから見れば自然だ」

光希は首を傾げながらも納得してくれたのか頷いてくれた。

「半径二メートル以内に近づかなければ、そう呼んでもいいわ。兄」

二歩引いて言った。

納得はしたようだが、信用はしてくれなかった。

「まずは君を事務所に案内しよう。そこが活動拠点になるからな」

「例のエロの巣窟ね。兄」

「もう捨てました！健全な男の子の部屋です！あと、逐一語尾に兄つてつけるなよ！」

アパートに向かって歩き出すと、光希も倣って付いてきた。…二メートル離れて。

「そういえば、君はいくつなんだ？」

「いくつに見える?」

「馬鹿にしているのか?」

「御名答。ご褒美に教えてあげるわ。高三よ」

辟易しながらも、会話を続ける。

「受験生じゃないか。どこの高校だ?」

「静修学園」

「すつげ。めっちゃ頭良い進学校じゃないか。東大とかに何十人と行くんだろ?」

俺は地元民ではないが、その名前はこの土地に暮らしていれば、誰もが知っている有名私立高校だ。

「勉強なんてお金をかければ馬鹿ほどできるものよ」

「お前の家は裕福なんだな」

「案に私を馬鹿と言ってるのね。上等じゃない。それで、あなたは?」

「俺は、ここの人間じゃないからな。ここよりもっと田舎の、君が知らないような高校だ」

「どこの田舎?」

「岐阜だ」

「ああ、中国地方の」

「お前は今、岐阜県民全てを敵に回した」

「何も無いけどいい所よね。行ったことないけれども」

「俺は郷土愛に乏しいが、他県の人間に、しかも行ったことが無い人間に何も無いと称されることがここまで心に来るとは思わなかった」

「私、自殺するなら岐阜がいい、と常々思っていたのよ」

「やめろ。俺の出生地を自殺の名所にしないでくれ」

「これ以上岐阜で話は膨らまないから、もういいわ。兄」

反論しようにも、岐阜の会話は打ち切られてしまった。膨らまないと言ったが、俺の岐阜の思い出は、極限まで膨らんで破裂していた。

馬鹿な会話を続けながら、アパートの前までたどり着く。

何故自殺する気なのかは、聞く勇気が無かった。踏み込んでしまえば、抜け出せそうにないからだ。

俺はやっぱり卑怯者だ。

「この嬉野壮102号室が『日之出興信所』の事務所だ」

光希は、ふーん、とだけ呟いた。

「まあ、汚い所だが入ってくれ」

木製の玄関を開け、光希を先に入れようとエスコートするように部屋の方へ腕を開けた。

「あなたから入って。あと、カギを閉めたら大声、出すわ」

「それほど俺の事、信用無いか？」

「興味はあるけど、信用は無い」

喜んで良いのか、悲しんで良いのか、喜怒哀楽の取捨選択に迷う事をはつきりと言われた。

結局四つの感情では俺の鬱積とした感情を表現することができず、「そうか」と所在なさげに言うより他に無かった。

そして、光希は、俺が部屋の奥に座るのを確認してから、無遠慮に部屋に入ってきた。本当に無遠慮に、靴を脱がずに。

「双島！靴！靴！」

すかさず往年のドリフのように突っ込んだ。今の子には『欧米か』
と言って頭を叩いてあげるほうがマナーなのかもしれない。（のちに光希にこの時の心境を語った事があるが、どちらも古いわ、おっさん、と失笑された）

「靴下だけになれ、と言うのね。変態兄」

「それも、すぐに逃げ出せるようにか？」

俺は、諦めながら一応聞いた。

「御名答と言いたるところだけど、少し足りないわ。靴で蹴った方が、効くでしょ？」

諦めて聞かなければ良かった。

「まあ、いい。座りたまえ」

俺は、座布団を指さして、座を進めた。

光希は、人差し指で座布団を突いてから座った。ブーブークツシヨンでもあると思ったのだろうか？

改めて見ると奇怪な風景だった。部屋に制服姿の女子高生がいるという風景は、背徳感で満ち満ちていた。しかし、『女子高生が部屋に居る』という事象を背徳と考える事自体が背徳なのだろう。

「改めて自己紹介をしよう。これ名刺ね」

俺は、名刺入れから名刺を取り出し、名刺の字を光希の方へ向け、両端を丁寧に両手で持って光希に渡した。

光希は驚いたように俺を見て、名刺を受取る。

「今、すごく社会人らしかったわ」

「失礼な。社会人だって」

「日之出興信所。安直な名前ね」

「覚えてもらうには安直な方がいいんだ」

俺は、自慢げに鼻を鳴らす。

「私、言われなかったから履歴書も親の同意書も何も持ってきていないわよ？」

「ああ、いいよ。そんなもの無くても。まだ、君を正式に採用するとは言っていないからね。まずは、採用試験とでも言えばいいのかな？試験をさせてもらうよ。ウチだって見ての通り余裕はないからね。使える奴が欲しいんだ。ここはシビアにやらせてもらうよ」

光希は、『正式に採用しない』との言葉に顔を曇らせるも、「何をすればいいの？」と尋ねてきた。

「簡単だけど、難しい仕事だ。君にクライアントを見つけてきてもらいたい。見事顧客を発掘し、ニーズ喚起できれば正式に採用しよう。これ、君の形式上の名刺とウチのチラシね」

俺は、先程作ったばかりのやる気の無い光希の名刺と同じく自由経済を馬鹿にするようなだらし無いチラシを配る。

「要は興信所の客を見つけて来いってことね」

「その通り」

「いつまでに？」

「どうやって？と聞かない光希に感心した。

「そうだな。俺も忙しいから今日中、だな」

俺は時計を見ながら、宣言した。もう夕方五時を回っている。心が痛んだが、厄介事に巻き込まれる事はもっと嫌だ。

「分かったわ」

光希は立ち上がり、部屋から出ようとする。

制服のまま行くつもりか？と声を掛けようと思ったが、黙っていた。

「頑張れよ」

その代わり、思ってもいない言葉を吐いてしまった。てつきり「うるさい」と怒られるかと思ったが、光希はこちらに顔を向けずに、こくりと頷いて玄関から出て行った。

その姿を見て、本当に、自分が情けなくなり、心底死にたくなっ

た。

光希はどうやって客を見つけるつもりだろうか。

やはり、手当たり次第の個人宅訪問だろうか。しかし、こんな時間では、どこも夕飯の準備なり、家族団欒の時間なりで、他人とは触れ合いたく無い時間帯だ。

六時になり、七時になっても、光希から連絡は無い。八時になって、流石に俺は不安になった。制服姿の女子高生がこんな時間に、「興信所の者ですが、何かお困りの事案はございませんか？」と訪ねてこられたら、不審者と間違えられて（実際、モグリだから不審者なのだけれども）警察を呼ばれても不思議ではない。いや、まだ警察を呼ばれるぐらいならばマシだ。もし、変質者が光希を襲ったとすれば、最悪だ。

俺は、光希に急いでメールを打った。「もういい。帰ってこい。飯でも喰いに行こう」と。

だが、光希からは十分待っても二十分待っても返事は無い。

諦めて家に帰ったのかな？それとも。

考えれば考えるほど嫌な方向に思考が及ぶ。不安になり玄関に駆け寄り、ドアノブに手をかけ、勢い良くドアを開けた。

鈍い音がした。

「痛てて！」

と同時に女の子の鎮痛な声がする。

「おお、お前か。無事だったんだな。良かった」

「無事じゃないわよ。このおでこを見なさい」

光希の額は真っ赤に変色していた。白い肌だから余計に紅潮して見える。

「猿のケツみたいだな。頭にケツとはニコちゃん大王か」

「うるさい」

俺の鳩尾に光希の拳がめり込み、膝から崩れ落ちて悶絶する。

「ニコ・チャン大王なんていたかしら？ チャンドラグプタの父親？」

光希は額を手で擦りながら聞いてくる。

「アラレちゃん知らないのか？ と言いつ返せないほど痛い。」

「取って来たわよ」

俺は、涙目で光希を見上げることしかできなかった。

「間抜けな顔ね。顧客を見つけてきたって言ったのよ」

光希はむっつりした顔で俺を見下ろす。

「マ、マジか。良くやったな。玄関先ではアレだから、中に入ろう。というか、中に入れて下さい」

まだ、痛みから立ち直れず、光希に向かって右手を掲げた。その際、光希は少し逡巡したが、俺の悲痛な瞳に負けたのだろう、額を擦っていた手を差し伸べてくれた。光希がまるで現世に現れたメシアのような気がしたが、すぐに気のせいだと気が付く。そういえば、光希にやられたんだよな、と。

光希の手をとって部屋に入れてもらおうと、ベッドに仰向けになつて横たわった。

「こんな姿勢で悪いが、それで誰から、どんな案件を取ってきたんだ？」

「隣の三丁目の『金座』という方からの依頼よ。内容は『息子を助けてくれ』とのことよ」

「何から助けるんだ？」

「さあ？」

「それだけ？」

「ええ、私は顧客を見つけて来いとは言われたけれども、解決までして来いとは言われなかったわ。だから、金座さんに『所長を連れてまたお伺いします』と言って辞してきたわ」

「所長と、か」

「そう、あなたと」

その金座さん、よっぽど困っているのだろうか？女子高生に助けを求めるほど。

心中は複雑だった。俺の望みは、光希が五体満足で無事に案件を取ってこないことだった。どちらが欠けてもいけない。光希は、無事だが案件を取って来ちゃった。どうなんだよ、金座さんなんて知らないよ。どうでもいいよ。

「分かった。合格だ。でも、今日はもう遅いから無理だ。今日のところは帰りなさい」

「駄目よ」

「な、何？あ、給料か。すまん、すまん」

俺は慌てて、財布から樋口一葉を一枚取出し、光希に渡した。

「違っわ」

「ゆ、諭吉先生は渡せないぞ」

「飯、喰いに行くわよ。私、焼肉が食べたいわ」

光希は、自分の携帯電話を取出し、煌々と光るディスプレイを指さした。

そこには、先程俺がメールした本文が表示されていた。

近くの焼肉屋で光希をご馳走し、その後家に帰した。送って行くが、無理やり渡した。樋口一葉も「いらないわ」と断ったが、無理やり渡した。

アパートに戻ると、当り前だが、誰もいなかった。考えてみるとこの部屋に足を踏み入れた他人は半年以上前に遡らなければいけなかった。もちろん、土足で足を踏み入れた人物は俺を含めて初めてだが。

一息つこうと、テレビの前で腰を下ろした瞬間、ポケットの中の携帯が振動しだした。メールだ。

差出人「双島光希」

件名 「ごちそう様」

本文 「先程は夕食を奢ってくれてありがとう。明日の予定を忘れていたわ。明日は午前中からでも問題ない。何時でも金座宅へ行きます」

今更行かないとは言えないよな。金座さんの息子さんに出ることはやって、出来なければ謝まって断ろう。

光希には、「じゃあ、十時に事務所に来て金座宅へ案内してくれ」と返信しておいた。

光希からは、

件名「了解」

本文」

との返信が来た。了解と件名に入れるのは彼女の家の家訓なのだろうか。

俺は、光希からのメールを確認し、底なし沼のような深い眠りについた。

どのくらい眠っただろうか、夢すら見ない眠りの中、突如腹部に鋭い痛みを感じた。陣痛とはこのような痛みなのだろうか？驚いて瞼を見開くと、ベッドの傍らに制服姿の光希が立っていた。

「うわぁ！化けてでてきたのか？」

俺は上ずった声で悲鳴を上げる。

「生きてるわよ。あなた、今何時だと思っているの？」

時計を見ると短針は『11』を指している。

「十一時です」

「良かったわ。時計が読めない人かと思ったわ。目覚まし時計はないの？」

無職は時間の概念を超越しているんだ、と言いかけて慌てて止めた。俺は興信所の所長だった。

「あるけれども、セツトを忘れたみたいだ。それよりもどうやって中へ？」

「鍵、閉まっていなかったわよ」

「それでも、一時間も外で待ってたのか？」

「外で待っていた方が良かった？兄」

光希は制服のスカート裾を両手で持ってひらひらと左右に舞わせた。

「いえ、中で待ってもらって正解です。それで、腹部の痛みなんだけれども」

「こんな可愛い女子高生に起こしてもらえるなんて、男の冥利に尽きるでしょ？」

自分で可愛いって言いやがった。

「最高です」

が、逆らうと二発目が飛んでくるので黙っておく。

腹部の痛みから回復後、起き上がって身支度をする。クローゼットを開け、久方ぶりのスーツを探しているとある違和感を覚えた。

俺の記憶にある配置と実際の配置が明らかに違っていた。

「なあ、一時間待っている間、何していた？」

「家探しよ」

「ここにあった箱の中身は？」

「ゴミ箱よ」

「お、お前！な、なんてことを」

俺はゴミ箱に駆け寄り、中を覗く。と、そこには、捨てきれずにいた残酷にも砕かれた女性の裸体（がプリントされたDVD）が。

「さ、さやか事務員！お前！この女性は、日之出興信所の大切な従業員だ！癒し課所属のアイドルだぞ？」

光希は、俺の必死な気迫もなんのその、興味が無さそうに携帯を弄っている。

「いやらし課の」

「癒し課だ！ワザと間違えやがって」

「さやか事務員は本日をもって一身上の都合により退社されました」

「一身上というか肝心の一身が砕かれているよ！？陰謀だ！殺人だ！」

殺人事件なんてフィクション、と高を括っていたが、まさか現実
に有り得るなんて、そんな、まさか。

しかも、犯人は助手の光希だなんて。

「エロは捨てたと言ったでしょ？捨て忘れていたと思って、捨てて
あげたのよ」

「器物破損だ。天網恢恢疎にして漏らさず、だ。いずれ君に罰が下
る」

「何を漏らすつもりなのよ。汚らわしい」

「俺も君も同時に品性を貶める結果にしかならない事言っな。それ
よりも、これより八十五分四十秒の黙禱に入る」

「何が品性よ。頭の中で上映しないでよ」

光希は呆れ返っていた。

「あつ、黙祷の間、飯作ってくれたら嬉しいな」

俺が敬礼のポーズで天井を仰いでいると、光希は冷蔵庫を開け「
なによ、これ。ほとんど何も無いじゃない」と文句をを言いながら、
キッチンに向かってくれた。

十分ほどして、俺にとっては朝食の用意が出来たのか、声をかけ
てきたので、瞼を開けると、テーブルにはインスタントの味噌汁と
ツナ缶（皿に移しておらず、缶のまま）と白米が用意されていた。

「うん。ありがとう。いつも俺が喰っているメニュー、そのまんま
だ」

正直、女の子が作る料理に、淡い期待をしていたのだが。

「文句言わないで。文句言つなら冷蔵庫に言つのね。黙祷はいいの
？」

「昔の女さ」

俺は、箸を手にとって手を合わせた。

朝食の後、無作法にパジャマを脱ぐ俺を見て、双島が俺の頭を叩
いたため、トイレでスーツに着替えて身支度をする。ネクタイを締
めるのは実に一年ぶりだ。まさか、またスーツに袖を通すことにな
るとはな、と苦笑した。

準備が出来次第、双島に案内されて金座宅へ向かった。

「おい、これが金座宅か？」

塀は三メートルはあるだろうか。坪数を聞くのも言うのも嫌味に感じられるような広大な敷地を、北方民族の誰一人と入らせないかのようにくるりと囲っていた。塀がある家というものは中でなにか悪事でも働いているのかと勘ぐってしまう。

「そうよ」

「お前、良くこの家のチャイム押す気になったな」

光希は無視して、インターホンを押す。

「こんにちは。金座さん。双島です。所長の海藤を連れて参りました」

光希は、インターホンのカメラを意識して笑顔で言った。

「あら。光希ちゃん、いらっしやい。今、開けるからね」

木製の門からガチリと音がして、重厚な音をさせながら自動的に門が開く。

「金があれば、魔法も使えるんだな」

思わずそう呟いてしまったが、聞こえるわよ、と光希が叱責し、俺の足を踏んだ。

「す、すまん。すまん」

門を潜ると、20メートル程先に洋風の家が見えた。日本式の門の奥に洋風の家を想像していなかったため、面喰らう。

光希は当然のように家へ向かって闊歩してゆくので、後ろについて行った。

どちらが所長か分からない。

家に近づくと、玄関が開き、中から60代ぐらいの女性が姿を現した。

「光希ちゃん。待ってたわよ。こちらが所長さん？私、金座良子です。今日はわざわざごめんなさいね」

金座さんは、申し訳なさそうに頭を下げる。

「いえいえ、ウチの双島が突然お邪魔して申し訳ございません。わたくし日之出興信所の海藤と申します」

社会人時代に多用した営業用スマイルを使って、金座さんに名刺を渡す。

この笑顔が自分には堪らなく嫌なのだが、「笑顔が素敵ね」と奥様方には好評だから使用しない手はない。

「じ丁寧にどうもありがとう。思ったよりも随分お若い方なのね。さ、中が上がって頂戴」

促されるまま、客間に通される。

「今、お茶を用意するから、ちょっとお待ちくださいね」

金座さんはそう言って客間を出ていった。

客間を見渡すと、古今東西あらゆる所の調度品が並べられていた。

「金座さんの旦那さん、貿易関係の会社の社長をやっているわ。ほとんどの外国にいるみたいだけどね。だから一人息子がよけいに可愛いいみたい」

「ふーん。じゃあ、これらは土産かな」

あまり、趣味の良い人ではないのだろう。男の死体を踏みつけるカーリー像の横にキリストを抱くマリア像を置くのはどうかと思う。

数分後、金座さんがお茶と菓子を持って現れた。

「すみません。いただきます」

俺は、出されたお茶を一口飲み、切り出す。

「早速ですが、ご依頼の息子さんの件を詳しくお聞きしてもよろしいですか？」

「ええ。ウチの息子の進なんですけど、そのなんと云ったらいいのか、今風に言つと草食系って言つのかしら。女性に奥手なんですよ」

「はあ、優しい性格の子なんですね」

「そう言っていたけると有り難いですわ」

「それで？」

「この間、あの子のためにお見合いをセッティングしてあげて。ほら、あの子もう三十二歳ですから。あの子、母親の私が言うのもなんですが、ちょっとカッコいいのよ」

三十二歳で独身といっても、まだ遅いという年齢でもなかるう。今は男でも晩婚だから。

それに親から格好いいと言われても、進君、もとい進さんは嬉しくはないだろうな。

しかし、奥さんの捲し立てるような早口に「はあ」としか言えなかった。

「でも、相手の女性からね。お見合いの日に断られてしまったの。ウチの進のどこが悪いっていうのかしら。ちょっと変わった所もありますけどね、それが人間ってものでしょ？」

続けて、聞き取れないような早口でその女性の文句を言っていたので、適当な相槌を打って聞き流していた。

「、、というわけなのよ」

ようやく話が一区切りついた所で、本題を伺う。

「それで、私に依頼されたいことというのは？」

「あら、ごめんなさい。依頼したいことなのだけれども、進に女性慣れさせて欲しいの」

「女性慣れ、ですか」

「ええ、元から奥手な子ですけど、お見合いの一件以来、益々女性に対して恐怖感を抱いてしまっているの」

女性慣れさせろ、と言われても俺は男だ。

キャバクラや風俗にでも連れて行けと言うのか？

いや、そうではないだろう。商売の関係ではなく、純粋な恋愛というものが必要なだろう。

「そうですね。簡単ではありませんが、お見合いでは、進君も緊張してしまいます。いきなり結婚を前提とした交際をしろ、と言われるれば仕方ありませんよ。まずは、結婚云々ではなく女性とデートさせてみましょう。まずは、そこからです」

「女性と言っても、進には女性と交友なんてありませんわ」

金座さんは反論した。

俺にも女性との交友関係など既に無くなってしまっている。他に女性と言えば。

俺は、光希を見る。

光希も俺の視線を感じ取って、その意図を理解したのだろう、光希は小さく首を振る。

俺は、光希に向かって小さく頷き、

「その点は大丈夫です。私が協力してくれる女性を紹介しましょう」

「そうですね！有難うございます。それで、その方はどういう娘ですの？失礼な事言うようですが、変な娘にウチの進と仮でもデートなんて許しませんからね」

「心配ございません。この、光希君ですから」

隣に座っている光希が肘で俺の脇腹を小突いた。

「首、振ったでしょ？」

光希は俺に小声で耳打ちする。

「同意の合図だろ？」

光希は手を机に隠して俺の腿をつねりあげる。「どこの文化よ！嫌よ。絶対に」

「まあ！光希ちゃん！光希ちゃんならば安心よ。知らない娘でもないですから。喜んでよろしくお願いしたいわ」

金座さんは立ち上がり、身を乗り出して光希の手を掴む。

「いえ、私は」

光希が困惑の表情を浮かべて断ろうとしているのを見て、「任せ

てください」と光希の言葉を遮って胸を張って俺は答えた。

今まで俺を虐めてきた仕返しだ。さやか事務員、仇はとったぞ。

「じゃあ、さっそく進ちゃんに会って頂戴。あら、その前にお茶のおかわりを持ってこようかしら」

金座さんは上機嫌で、俺のカップを取り、去っていった。

「どづいつつもりよ」

光希は、目を吊り上げて怒っている。

「どづ、って。お前、この場にいただろ。そういうことだよ」

「嫌よ。おっさんとデートなんて。死んでやるわ」

光希はそう言って、鞆から錠剤が入った瓶を取り出した。

「ま、待て！ドクロが描かれた瓶とか典型的過ぎるぞ」

俺は慌てて瓶を取り上げる。

「所長命令だ。これは仕事だ、嫌な事なんて仕事していればいくらでも起こる」

光希は小さく唸って、そして小さく頷いた。

「そつだ、お前。奥さんの言葉で引っかかったんだが、『知らない

娘』じゃないってどういうことだ？」

「金座さんは、父の会社の取引先なのよ」

光希は溜息をついた。

「なるほど、そういうことか」

高校生が飛び込みで、しかも短時間で顧客を見つけるところなどできるわけがない。

「まあ、コネというものは社会で最も重要な結びつきでもあるからな」

世の中、驚くほどコネが横行しているものだ。何も入社する際に使うものがコネと呼ばれている訳でもない。

「私だつて使いたくなかつたわ。本当に偶然だったのよ。私が父の取引先なんて分かるわけないじゃない。私自身面識は無いのだけれども、名字で気が付いたみたい」

「まあ、それが君の力でもあるんだよ。いい親父さんを持ったな」

俺は嫌味つたらしく言った。

「私、あなたが本当に嫌い。殺したいわ」

光希は俺を睨みつけた。

「大人になれよ。光希」

俺は、某バスケット漫画の台詞を言って、がはは、とわざとらしく笑った。同じ言葉でも場面によってここまで嫌らしい意味になるのか。

金座さんが戻ってきたので、お茶を頂き、二階の進さんの部屋へ案内してもらった。

「進さんはお仕事は何をされているのですか？」

階段を登る途中で金座さんに尋ねた。

「進ちゃんは、ウチの会社の資産運用をしているわ。デイトレーダーというのかしら。ほら、進ちゃん。対人関係を築くのが不得意だから。そっちの方が合っているのね」

対人関係が得意な人間なんていないだろう。誰もが思い悩む所だ。

個人のデイトレーダーか。あまり良いイメージはない。一日中パソコンに向かって、自分とはなんの関係も無く、支援したいとも思っていない上場会社の株を右から左へ移して利潤を得る寄生虫だと思っている。仕手戦をしかけるわけでもなく、総会屋とも違い、顔を出さずにクリック一つで儲ける、なんとも今の日本を象徴しているようで嫌だ。

もちろん、そんなことわざわざ言わないし、リスクを背負い税金も支払う分、無職よりは立派だ。

「進ちゃん。開けるわよ」

金座さんは、進さんの部屋のドアを開ける。

「おい、婆！勝手に開けるんじゃないねえ！」

男の怒号と共に空のペットボトルが金座さんの足元に投げつけられた。

俺は、金座さんの後ろから、部屋の中を伺った。

カーテンを閉め切り、蛍光灯の人工的な明るさから無機質な印象を受けるが、綺麗に整頓された部屋だ。机の上には三台のパソコンが並んでおり、一台は株価の過去のチャート表を、もう一台は円ドル相場の推移表、もう一台はアニメ調の女の子が映し出されていた。

さらに良く見ると四方八方にガラスケースが並んでおり、中にはフィギュアが並んでいる。色々なフィギュアがあった。怪獣や某有名お菓子チェーン店の舌を出した女の子に乳房を露わにした女の子、扇情的なポーズを取る女の子、というかスペース的には魅惑的な女の子のフィギュアの方が多い印象だ。

なるほど。進さんはオタクさんなんだな。

「ごめんね、進ちゃん」

「いいよ、もう。なんの用だよ」

「今日はね、お友達を連れてきたのよ」

「はあ？」

俺もお友達という表現には進さんと同じ感想だ。

「こちら、興信所の海藤さん」

金座さんはそそくさと逃げるように、後ろにいた俺を自分の前に引っ張った。

「ど、どうも。只今ご紹介に預かりました日之出興信所の海藤日出道と申します」

俺はお辞儀しながら挨拶をする。

「はあ。どうも。金座ワールドコムの金座進です」

進さんは、俺に合わせてお辞儀をする。

初対面同士が顔を合わす独特の空気が場を支配する。疑心、不安、焦燥が入り混じる空気だ。空気を食む仙人でもこの空気には食中り必須である。

進さんはあまり外に出ないのか、肌は病的に白く、お腹が少し出ているぽっちゃりさんだ。

俺が進さんを観察していると、

「それで、興信所の方が何か？」

と至極当り前の質問を受ける。

「え、えーとですね。奥様からご依頼を受けまして、進様を、なんというか、女性に積極的になれるためにお手伝いするよう仰せつかったものですから」

俺はしどろもどろになりながら説明する。

「はあ？そんなこと、海藤さんにしてもらわなくていいよ。忙しいんだ。帰ってくれよ」

進さんは、回転椅子を俺の方からパソコンへと向き直した。

俺だつてお前の事なんて興味無いんだよ、と心の中で悪態をつく。内心、アパートへ帰りたくなっていた。

「進ちゃん。そんなこと言わずに、ね？今日は日曜日でしょ？相場も動いていないわ。ちよつとだけ、ね」

金座さんが助け船を出す。

金座さんは本当に息子の助けになりたいんだろうな。

「うるせえ！なんなんだよ！てめえはよ！この前も糞みてえな女と勝手に見合いさせやがって！勝手にフラれてんだぞ！こつちはよ！」

進さんは、今度はコップを持ち上げた。

俺は、咄嗟に金座さんを庇おうと金座さんの前に立ち塞がったが、進さんはコップを投げてこなかった。

口を半開きにして、ある一点を見詰めている。

その視線の先には、制服姿の光希がいた。

「その、怒号が聞こえたから何事かと思って」

光希は部屋に入って、目をきよろきよろさせて辺りを見渡した。

「何、これ。マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』の世界に入り込んだみたいだわ」

光希は、エロフィギュアにショックを受けたのか、両手で口を押えて呟く。

いや、意外と冷静だな、というかなんて本読んでいるんだよ、俺は胸中で突っ込む。

「進さん？」

進さんは蠟人形のようにカップを持ったまま固まっている。

「じよ、じよ、女子高生がな、な、な」

唇を震わせ、声ならぬ声を漏らす。

「ああ、すみません。ご紹介が遅れました。この子はウチの従業員でして、双島光希と申します。私と『双島』とで、進様の女性慣れのお手伝いをさせていただきます」

俺は、双島を紹介した。そして、双島の名前を強調した。

進さんはまた、パソコンの方へ向き直した。顔は紅潮している。効果ありだ。進さんは年下がお好みなのだろうか。

「そ、そ、それで、じよ女性慣れって何するつもりだ？」

進さんはどもりながら俺に尋ねた。光希には見向きもしない。

進さん、光希を気に入ったな、と直感する。

「そうですね。双島とデートされてはどうかでしょう？」

「で、デート！」

上ずった声で進さんは叫ぶ。

「ええ、双島はチビで子供ですが、まあ出るところはそれなりに出ておりますので、それなりの格好と化粧をさせれば、大人の女性のような容姿になると思いますよ」

光希はぼそつと「後で鳩尾ね」と呟いたが、忘れることにする。

「い、い、いや。こ、こ、高校生っぽい格好でお願い、い致したい」

高校生っぽい格好でお願い致したいって。同じ男でも進さんの発言に引いてしまった。

言われた光希は、目に見えて分かるように引いていた。ドン引きという奴だ。

しかし、ここに引いていない人が一人。

「あら、進ちゃん。デートする気になったのね！偉いわ！さすが男の子ね！」

金座さんは手を叩いて喜ぶ。

うん。確かに男だ。ただ、褒められることではなからう。

「それでは、ここは若いお二人に任せて、奥様、我々はここらで」

「そうね。進ちゃん。頑張るのよ」

金座さんは励ますように、握りしめた拳を前に出す。

光希が目で訴える。

その目は、殺意で溢れていた。

これは鳩尾だけでは済まなそうだ。虐め過ぎたかもしれない。

「ち、ち、ちよっと、待つてくれよ。二人きりにさ、されても、な、なにしていいか、わ、わからないよ」

進さんは、慌てて話す。

「そうですよね。分かりました。私が仲介役になりましょう。奥様は我々に任せて、下でお休みになっていて下さい」

金座さんは、そうですか、と言って部屋を出て行った。

「ま、まあ、腰をかけてよ」

座布団を出してくれ、床に置いて座を進められる。言葉に甘えて、俺と光希は座った。

「ふ、双島さんは」

金座さんが部屋を出るのを確認して、進さんが切り出す。

「光希と呼んでいただいて結構ですよ。みつきちちゃんでも、大丈夫です」

俺は、進さんの言葉を遮って言う。
茶化してみて、光希の様子を窺う。
何も反応が無い。相当お怒りのようだ。

「じ、じゃあ、みつきちゃんは、本当に高校生なのか？こ、高校生が興信所の社員というのも変じゃないか？」

光希は何も答えない。

「いや、こいつは私の妹なんですよ。従業員と言っておりますが、手伝わせているだけです。だから、なんの気兼ねもありませんよ」

「でも、名字が」

「色々あるんですよ。周りに言わないで下さいね。お母様にも。な、光希」

「そ、そうか。変な事聞いて悪かったよ」

納得してくれたのか、それ以上言及してこなかった。

「あなた、良く嘘がペラペラと付けるわね」

進さんに聞こえないよう小声で光希が呟く。
良かった。回復してきたようだ、精神が。

「ああ、嘘も仕事を円滑にする一つの方法だ。お前も合わせろ」

俺も小声で返答する。

「そうなんです。兄がどうしても手伝ってくれて泣いて喚いて這って私の靴を舐めながら懇願するものですから。捨てられた小汚い子犬のように。ね、兄」

どんな兄だ。

「え、ええ、ゴム靴ではなくて革靴だったから良かったですわい。がはは」

なんて兄だ、と光希は俺の性癖を疑う目で見る。冗談に決まっているだろ。

「なるほど。で、でも、僕は舐めるなら汗が染みこむゴム製のほうが好きだなあ」

こんな顧客だ。

進さん、モテないだろうなあ、絶望的に。男も引くということはないかな。なかなかない。

光希は、目を回して気味悪がっている。

話題を変えよう。

「しかし、進さん。凄い数のフィギュアですね。ここまで多いと壮観ですな」

言ってみて気が付いた。話題の本質が変わってない！

「他に趣味が無いので金がありますからね。それにフィギュアはいいですよ。維持は大変ですが、この子達には変わらない美しさがあります」

進さんは誇らしげに語った。

「美しさですって？エロさの間違いじゃなくて？」

光希は冷静に追及する。

「なにをおっしゃる！ポツティエリの『春』も裸婦が描かれておりますが、エロい目で見える人間はいないでしょう？皆、あれを芸術だと有難がる」

進さんは捲し立てるように反論する。

「そ、そうですね。子供には表面上の美しか分からないんですよ」

俺は興奮気味の進さんをなだめる為に同意しておく。が、どう考えても『春』とエロフィギュアは同一ではないだろう。製作の意図の段階で違うと思う。『春』の女神が扇情目的で四つん這いになつて縛られていたら、いかに回帰主義のルネサンス期といえども異端会議に掛けられ、「火あぶりやないかあゝい」と判決が下っていた

だろう。(のちに光希にこの事を伝えたら、またしてもおっさんの四文字が飛んできた)

「分かってくれますか。海藤さん」

「ええ、もちろん。女子供には分からんのですよ」

光希が呆れて溜息をつく。

「それで進さんはどんなデートで私をもてなしてくれるのですか？」

「え、え、もてなす？そ、その、ぼ、僕が？」

「男がリードする、なんて古臭い思想はないけれども、進さんが計画してくれなければ、とても女性慣れなんて出来ないわ」

「そ、そうかい。でも、ぼ、僕、デートなんてしたことないし」

「ええ。そうでしょうね」

光希が抑揚のない声で、はっきりと断罪する。

「おい、光希。失礼だろ。進さんは素敵な出会いがなかったただけだ」

俺は光希をたしなめた。

「では、兄が教えてあげれば？昔から女性に不自由しなかった兄が」

光希は不敵に笑いながら挑発する。復讐のつもりか。

「か、海藤さん。是非、お願いします」

俺は困惑した。出来ることなら昏迷したい。ばたん、と倒れた
い。

俺もそんなに経験無い。付き合った女性は一人しかいない。

「あゝ、まずはですね。映画館なり、遊園地なりのアミューズメン
ト施設に行き遊びます。その後に喫茶店などでお喋りをして、夕食
を取ります。以上」

光希は、笑いを堪えて体を震わせている。

「そ、そんなもんですか？デートって」

「まあ。何もせず、ドライブだけってこともありましたが、初めて
のデートなんてこんなもんでしょう」

そうなのか？初めてのデートなんて覚えていない。だから、フラ
れたのだろうか。

「わ、分かりました。じゃあ、みつきちゃん。え、え、映画に行き
ましょう」

進さんは椅子から立ち上がった。

「ええ」

同じく光希も立ち上がったため、俺も倣う。

「いいのか？」

俺は光希に耳打ちする。

「一刻も早く、この空間から出たいわ」

光希と進さんは、金座家から共に出掛けて行った。出掛ける際に、金座さんから「進ちゃん頑張つて」と声をかけたので、俺も「頑張つて来て下さい」と同じく声をかけた。どちらかと言うと、俺は光希に向けて励ました。

二人を見送り、俺は金座さんに挨拶をしてアパートへ戻った。

デートが終わり次第、光希には一旦アパートへ戻るようお願い付けたのである。一応、進さんには光希が高校生であることを念を押しておいたので、『事』が起こることは無いと思う。ただ、女性に気弱な進さんが光希に猥褻な行為に及ぶとも考えられないが。

「ただいま戻つたわ」

光希は、七時過ぎに戻ってきた。

「お疲れさま。どうだった？デートは」

「ご想像通り最悪よ。なんにも面白くなかつたわ」

光希は吐き捨てるように言う。

「そつか。失敗だったかな。お前では、最初のデートの相手としては難易度が高すぎる」

「なによ、難易度つて。人をゲームみたいに言わないで」

光希は鞆から水の入ったペットボトルを取り出して、一気に飲み干した。

「失礼なこと、していないだろうな」

「失礼はあつちよ。命短しうら若き乙女の時間を無駄にしたわ」

「どうでも良い事に時間を費やす事が仕事つてもんだ」

「馬鹿みたい」

「馬鹿みたいな事が幾重にも折合わさって、馬鹿な俺らがのほほんとして生きていられる資本主義経済様が構築されてるんだ」

「あなた、いい加減な割には理屈っぽいのね。やっぱり嫌いだわ」

「ありがとよ。嫌いなら俺に付き合わなくたっていいんだぜ？」

俺は少しイラついていた。その原因は…。

「仕事上で嫌な事なんていくらでも起きると偉そうに言ったのは誰かしら？」

「…俺だ。すまなかつたな。まあ、お前も一応最後まで進さんのデートに付き合っただもんな。悪かったよ。腹が減って機嫌が悪かったんだ」

「本当、大きな子供ね。あなた」

光希は、俺と出会ってから何度目になるであろうか、溜息をついた。三回連続で。

「みつきちゃん。なんか作って」

光希は無言で手を差し出す。

「なに？お前の手を喰えってか？酒吞童子になっちまうよ」

「馬鹿言っていないで材料費よこしなさいよ。私があんなものしか作れないと思われるのは心外だわ」

三十分後、食卓には色とりどりの料理が並んでいた。ポテトにレタスにソースがかかったハンバーグ、パンと洋風の料理だ。

「この料理、至る所に『M』の文字が見えるんですけど」

「スーパーが閉まっていたのよ」

「そうだね。そういうことにはしておこうか」

「本当よ」

「分かってる。既製品は完成されているからね。安心だ」

右頬に衝撃が走る。

「人が食べてる時に頬を叩かないように」

「今にみてらっしゃい。ほえ面かせてやるわ」

「既にかいてます。調子に乗ってごめんなさい」

激痛に口を大きく歪めながら俺はベソをかいた。

ハンバーガーを食べ終え、光希を家へ帰したのち、携帯が鳴った。携帯を覗くと、知らない電話番号が表示されていた。

市外局番がこの地域の番号であったため、着信相手を想像する。

まあ、多分あの人だよな。チラシに俺の携帯番号載せているから。

俺は半ば諦めながら、着信ボタンを押した。

A b o u t a g i r l 1 2 (前書き)

すみません。

遅れました。

久しぶりの投稿です。

「はい、海藤です」

「海藤さん！金座です！どういっつもりなんですか？ウチの進になんてこと！」

金座さんの金切声が鼓膜を突き、思わず携帯電話を耳から離す。

「すみません。双島が大変失礼しました。双島も反省しております」

光希が失礼なことをしていない訳がない。本人にはその意識がないだろうけど。

「進が！死んじゃうわ！死んだら絶対許しませんからね！」

「死ぬ、とはどういうことですか？」

もう、この手の話はうんざりだ。

「帰って来てから、何も口を利かないの！泣いた跡があつたわ！訳を聞いても死にたい、としか言わないのよ！どうなってるのよ！こっちが聞きたいわ！旦那に言ってランドランド製薬さんとの関係を考えてもらおうと言ってやるわ！」

「ちよ、ちよっと待ってください。分かりました。今からそちらにお伺いします。私が直接、進さんに聞いてみます」

「来てもらっても何をすって言うの！」

「同じ男ですから、私の方が話易いと思いますよ」

しばらく無言が続いた。

「分かりました。お待ちしておりますので、早く来てください」

通話が切れた事を確認し、深い息を吐いた。

光希を帰しておいて正解だったな。光希ならば進さんを殴りに行きかねない。

俺は再度、身支度を整えて金座宅へ向かった。面倒だが、仕方がない。無関係なランドランド製薬さんに迷惑をかける訳にはいかないだろう。しかし、ランドランド製薬って。光希の親父さん、それはないわあ。

「お待ちしておりましたわ！早く進の元へ行つて頂戴な！」

金座さんは目を吊り上げて、到着したばかりの俺を急かした。

二階へ上がり、進さんの部屋の前へ立ち、ノックする。

「進さん。海藤です」

無言。

「入りますね」

俺は一言断ってから、用心深くドアを開ける。

相変わらず、カーテンを閉め切り暗室のような部屋だ。ただし、

昼間来た時よりも暗かった。

部屋の電気が点いておらず、フィギュアを入れたガラス棚の蛍光灯が、淡くフィギュアを照らしているだけだった。

「ああ、海藤さん。なんか用？」

フィギュアを眺めた進さんが、俺を一瞥した。

目は焦点があつておらず、抜け殻のようだった。

「いえ、ウチの双島がご迷惑をお掛けしてすみません」

俺は、誠意を込めて謝る。表面上の誠意だけだ。

光希の名前を出すと、一瞬進さんの肩が強張った。

「いいよ。もう。みつきちちゃんの言ったことは正しいよ」

「え？なんと云ったんですか？」

「聞いていないのかい？『お前は生きる価値が無い。すぐ死ね』だつて。ママに言えないよ、そんなこと。でも本当、その通りだよ」

酷い事を言う女だ。俺は、進さんに同情した。

「そ、そんなことを言いましたか」

「心底分かったよ。ツンデレというのはフィクションだから許せるんだよ。プログラムされた道筋からこっちはデレが来ると分かっているから許せるんだよ。リアルだと、デレが来る確証も僕の器量もないから、こっちの精神が持たないよ」

光希はツンデレなのだろうか。単に頭が可哀想な奴だと思っていた。

「その分、フィギュアは良い。僕を傷つけない。不変の青春を与えてくれるんだ」

進さんは、恍惚の表情でフィギュアを眺めた。

「面白いですか？それ」

「面白いし、楽しいよ」

虚ろな目で進さんは答える。

「本当に？では、どうしてお母様に死にたいなんて言ったんですか？死にたいということは現状が不満だからでしょう？打破する手段が死しか見当たらないからでしょう？」

「分かっているよ。でも、僕には死ぬこと以外にはコレしかないんだよ」

進さんはフィギュアを指で示す。

「フィギュアはただの逃避です。具体的な行動じゃないから死よりもスマートじゃない。苦しみには原因があります。それを断ち切る必要があります」

苦しみには原因がある、と手塚治虫先生のブツダが悟っていたから、本当だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707t/>

無職 偽職 + 女学生

2011年10月9日02時04分発行